

YO-U

瓊



2020. 9. Vol.20 No.3 Autumn

三十歳

林田 麻裕

私の好きな人誰でしょう冷奴
一週間の元気をくれる祭笛
へこむことだってあるわよゼラニウム
グウと鳴るのは十一時草むしり
跣になりラジオの電源を入れる
微粒子になりたい君もでしょう夏
蟹つかまえる記憶一番古い
五月晴あの人今日はいい女
梅雨寒やワクチン打った跡撫でる
ジャスミンが蕾をつけて誕生日
あの人はずいぶん五十で半ズボン
三十歳バナナを食べて始まるよ

父の日月の日に何もしたことがない。唯一覚えてるのは、幼稚園で似顔絵を描いた栓抜きをプレゼントしたことくらい。大人になって、いつもありがとうと言いたくなるのだが、恥ずかしくて言えない。親孝行はできているだろうか。風呂掃除と食器洗いと週一の料理は私にとっては花嫁修業だが、喜んでもらえているといい。将来結婚したら両親を連れて旅行に行きたい。旦那様には気を遣わせてしまいが、我慢してほしい。私は母方の祖父母とよく旅行に行っていたので、普通のことなのだ。父は耳が遠くなってきた。ついにおじいさんに近付いてきたのだろう。父の老いを感じるたびに、自立しなければと思う。自分にぴったりの職場が見つかるといい。両親に初任給で何か買ってあげよう。私の親で良かったと思ってもらえますように。

あんぽんたん

火箱 ひろ

大丸の自惚れ鏡夏に入る
桐咲いて風の缶詰送りましょ
思い出に汐満ちてくるあいの風
緑の夜テナーサックス哭きたそう
その部屋の展翅の青筋揚羽蝶
雨あがる蟻んこだって泳げるぞ
ハンモックあんぽんたんが揺れてます
爺ちゃんのさいづち頭緑さす
婆ちゃんの声の夏めく朝の庭
会いたいねココロに空き地アオバズク
高槻へ帰る薄暮の夏帽子（句友・甲斐さん逝去）
大西日どこか何かのファンファーレ

私は「父の日」も「母の日」も馴染みがない。私の親世代は、戦後の家の立て直しに必死だったし、子どもは当たり前のように育った。夫と私の両親に「父の日」「母の日」のプレゼントをしたのは、結婚した翌年、父たちには甚兵衛、母たちにはブラウスを贈った。で、それから続いたかというところではない。夫の仕事柄、仲人を何度かしたが、そのお嫁さんから母の日にいただいた、フェイラーの小さなバッグは二十年大切に使っている。子どもはいないけれど、たくさんの幸せのおすそ分けをいただいたと思っている。

明易し

松井 季湖

あのおおき背中想う日父の日は
 ええぬまま夏マスクへと季は移り
 目に残る青田ざわざわ旅に出たし
 愛おしき円形脱毛梅雨深し
 幾千の祈りか雨の十葉野
 湖の疵抱くかに出水あとの空
 短夜の絵の中の猫歩きだす
 川の字の崩れにくずれ明易し
 ココナツオイル甘く匂える髪洗う
 カタヌキの薄桃色や夜店の灯
 夜店の灯遠くで鳥の声したる
 土用丑幟に泳ぐ「う」の文字

母子草 サトウハチロー
 母子草
 母子草
 その花も葉も
 なんといいことのない
 つまらないものです
 けれど
 母子草という言葉の響きが
 こころにすなおにしみこむのです
 この詩は、大好きな詩の一つで、庭に母
 子草が咲き始めると、ふと思い出し、口を
 ついて出る。
 母の日、今年も衣類とカーネーションを
 贈った。母は大喜びしてくれたが、しばら
 くすると「これなんやろ？」と、プレゼン
 トの包みを不思議そうに指差した。
 いい、いい。その時々が嬉しければ。喜
 んでは忘れ、面白がっては忘れ。それでい
 い。
 母の日、満面の笑みで私を見てくれた母
 の気持ちに、ここにすなおにしみこんだ。

ため息

おーた えつて

みかん咲く「細胞の不思議」など読んで
 どくだみの白い匂いや夕間暮れ
 ほうたるや泣いたり笑ったり光ったり
 遠くまでもっと遠くまで蛍
 もう少しここにしようね夕螢
 はつなつやおもらししちゃったけどあそぶ
 バナナ食うちよつとやさしくなれそうな
 毒だしょうがいしてみたりして緑雨かな
 疫病退散噴水どつと吹き上がり
 噴水やとぎにため息めいて止む
 暑気払い「はぬっ」と声にはならぬ声
 ミミズ鳴く「動的平衡」の主張

理想の母の日は、母の日女子会かな。か
 なり気の合うメンバーと居心地の良い場
 所。美味しいお食事とお茶とお菓子も。
 そうして、心置きなく、食べたり喋った
 り、くつろいだり張り切ったり、泣いたり
 笑ったり……、半年前まで、母の日でな
 くても、いつもやってた……それが今や私の
 空想上のもの。
 その気がついて、なんとなく、うすらば
 んやりと、がっかりした。

百年後

青葡萄品格ないと言われても

核心にふれる手前のかしわ餅

青楓ココロ乾燥注意報

知恵の輪のうんともすんとも青胡桃

ほんとうだトットトキヤキヨクほら鳴くよ

葉桜のそよぎピアノはピアノニッシモ

ドイツ語は得意なんです青蛙

鉄砲で飛ばそう輪ゴム夏の空

どの服も陰干し表示ねむの花

足の爪ばちんと飛んで七月へ

百年後みんなで食べる梅漬ける

逃げ出した馬ゆったりと夏草を

たかはし すなお

結婚と同時にパートナーの両親と同居した私にとって「父の日」も「母の日」も忘れてはいけない大切な日。私の事だから実家の両親にも何かプレゼントして欲しいと思

うが思い出せない。仕事や子育てに忙しく、ひよつとしたらスルーしていたかな。

父にはふたりで出かけた楽しい思い出や、素敵なプレゼントをもらっているのに。母には、裁縫、編み物の基礎を教わった。料理もなんとなく美味しく出来るのは、母のおかげだと思っている。ちよつとおしゃれな夕飯を作った時には、父は「なおこの作るご飯は美味しい。」と喜んで食べてくれた。

長男の誕生日には大きな鯛を提げて、ふたりでやって来た。鯛を調理するのはパートナーだったが、ひとりの孫を真ん中に二組の爺ちゃん婆ちゃん笑顔。これが何よりのプレゼントだったかな。

森の子

柿若葉たまに牛丼親子丼

ジグソーパズル飽きて金魚を揺れさせる

夕暮れてほうたる忘れかくれんぼう

かきつばた大田の沢に山彦来

たまさかに行き逢うことも夏至の雨

マーマレードとろとろ煮詰め青葉雨

紫陽花は午後の私を惑わせる

真昼間のちんたらぼんの青毛虫

夏の森ズボンで拭いてハーモニカ

森の子にせせらぎの音青葉光

緑蔭の二人で座りたくなる木

青空に少し疲れて合歓の花

こしめきい

父は男兄弟の長男で、私の誕生をとて喜んでくれたらしい。妹が生まれるまで、父の横には私、母の横には兄の蒲団が敷かれていた。母は世間並みに私の婚期を気にしていたがその内諦めた。父は、「急がせなくていい」と呟くように言うのが常だった。それでも、とうとう花嫁になっていく日の私を、障子の向こうからどんな思いで眺めていたのだろうか。「挨拶は前夜に済ませてくださいね」と着付けの先生に言われていたが、明るく振舞う母の言葉に父の横顔に、もう胸がいっぱい。後々母から、「毎晩手紙を読み返しては泣いていはったよ」と。母も亡くなり、父の引き出しの手紙と、父の日に送ったマフラーが残った。

「お父さんに代わって」と近況報告が終った受話器の向こうから息子。夫は嬉しい顔で、男同士の会話という感じ。息子もいいお父ちゃんだ。今日は父の日。

北極南極

辻 響子

豆飯を二膳ころころ可笑しい日
蜜豆の豆が転げて笑い転げて

「な言葉」の賑やかな声土用餅

名画座にちんまり座り古扇

サイケキテレツひよつこりと浮いて来い

お念珠は真珠日傘の人となる

襟元のフリル真つ白日の盛り

あの人と同じふるさと夜店の灯

犬の名でロボット廻る夏を拭く

地球儀の北極南極大西日

主婦業閉店しました水茶漬

イニシャルを刺せば夏休みは終はる

ヌカ床は五年物だった。夏は朝晩かき混ぜ冬は塩蓋をして、大切に育てて来たけれど。

手入れは悪くないはず。年々上昇する暑さのせいとしたいわ、味が悪い気がする。姑さんのは美味しかった、隣りの婆ちゃんのも。漬物が家庭によって味が違うのは、住む菌がそれぞれ違うから。この辺りだと少し前まで各家庭に味噌蔵があつて、味噌醬油の他に、糠床粕漬ラッキョ漬、梅干しといった家庭の漬物がたくさん保存されていて、それこそ家族のような菌がわしゃわしゃ住んでいた。きちんとした住処のない私の菌の反抗期だろうか。

今度こそ姑のような美味しいヌカ床を手に入れたいと、母の日には味噌蔵が欲しいと頼んだら、それは無理やが、大豆や酒糟を田に与え、せつせと育てた僕の可愛い無農薬米の米ヌカを使ってみたら、と思子。ついでに手入れの楽な冷蔵庫漬けを勧められた。

味の良し悪しは材料では決まらないと聞いているけど、これが美味しい！ って勝負は五年後だけだね、とは天の声。

ハグ

辻 水音

梅雨寒の指にアップルミントの香

友に会ふハグはだめよとアイスクリン

湖の風涼しへしこの鯖太し

あえかなる立葵なぞ売り並べ

獣出るらし青葉時雨て明智塚

コンクリの道が途切れる夏の霧

でで虫や蓬萊山のふもとまで

定食に赤いコンニャク梅雨深し

ねむ咲いて村のはづれの理髪店

話ある？聞くよ何でもかなぶんぶん

献立の手ぬきの手段ひややつこ

茅花流しに父のこと母のこと

「母の日」を歳時記で引くと傍題に「父の日」とあつて、なんだ、父の日は所詮：と思いつつ「父の日」を引いてみたら傍題に「母の日」とあつた。あゝやれやれ、なんだかホッとした。

母の日になると、花屋さんにカーネーションがあふれ、こんなに陳列して売れるんやろか？と心配になる。ハロウィンやクリスマス、バレンタインと、いろんな行事が次々やってきてはサッサと姿を消し、店側はめまぐるしい。売れ残ったものはどうなるんだろ、ロスは辛いなあ：なんて「大きなお世話だ」と言われても気にかかる。

そういえば「母の日」「父の日」というものを自覚せず生きてきた。習慣のない時代だったかもしれないが、自分のことしか見えず、両親を思いやることの無かった未熟さもあった。今となつては取り返すすべもなく、堪忍して下さい、と言っしかない。

母の日

急変の報を受けて

佳奈へ急ぐはつなつの月沈みゆく
母の日を越えて呼吸をやめた娘よ
告別の献花や桃色カーネーション
包丁に佳奈の銘ある夏至夕べ
追想のなかの娘の初浴衣
芍薬の水切り横に佳奈もゐて
いちにちに何度名を呼ぶ梅雨の月
悲しみの顔がほどけぬ半夏生
凌霄花死後の世界を学びたし
二回目の月命日で梅雨晴れて
七夕を待つてみたのに逢ひに来ぬ
微笑みの写真に供ふさくらんぼ

はしもと 風里

令和二年五月十日母の日。
私は大きなプレゼントをもらったのかも
しれない。前夜、意識不明となり自発呼吸
が弱くなって挿管され酸素を吸っていた
娘。大きく肩を上げ下げして一生懸命生き
ようとしていた。頬を撫で頭を撫でながら
耳元で名前を呼び続ける。幼い頃の顔とだ
ぶって見えて可愛らしかった。握った手を
握り返してくれることはなかったけれど必
死に酸素を吸い続けた。時に痙攣を起こし
ながらも酸素を吸うことを止めなかった。
娘が呼吸をやめたのは十一日未明。母の日
を生きてくれた。最後の母の日、精一杯の
愛に満ちた佳奈からのプレゼント。
二カ月たった今こう思えるようになった。

LAIN

指長き和釘職人夏来る

五月闇かんかん和釘たたく音

奇数より偶数が好きさくらんぼ

雨の日はビリー・ジョエルとわらび餅

思い出と一緒に揺れる籐寝椅子

登山靴こんなところにもディスプレイス

ピンと鳴る自治会LAIN緑の夜

麦秋の少女よく泣きよく歌う

ねむの花園長先生さようなら

緑陰の眠り覚めなくてもいいか

月涼し今宵海亀の産卵

とりねむるひとねむるなつのもりさわぐ

波戸辺 のぼり

父は年金を一度だけもらって、三十八年
前に六十歳で亡くなった。父からは助けて
もらうばかりで、親孝行もできなかった。
父の日にも、何かをしてあげたという記
憶がない。みんなが元気で親に心配をかけ
ないことが一番の親孝行だと思っていた。
両親がいつもそう話していたのに、甘えて
いたのだ。
デパ地下に行ったら、老舗の和菓子屋に
足が向く。買うのはいつも同じ菓子。お茶
を飲みながらそれを食べて父を偲ぶ。父が
存命だったら「ほら、父さんと、同じ名前
の「未富」という、京都の和菓子さんのお
菓子だよ」と、未富ブルーと言われる美し
い包装紙に包まれた「うすべに」を日本茶
と和菓子が大好きだった父へのプレゼント
の定番にするのになあ。